角文創業200周年記念特別対談

総合建設業・不動産開発事業を手がける角文（愛知県刈谷市泉田町古和井１）は今年、創業200周年を迎えた。創業は1823年（文政６年）。これを記念し、鈴木文三郎社長が黒龍酒造（福井県吉田郡永平寺町松岡春日１―38）の水野直人社長を訪ね、「200年企業が守り挑むもの」をテーマに語り合った。「黒龍」や「九頭龍」の日本酒ブランドで知られる黒龍酒造の創業は1804年（文化元年）で、角文と同じく創業200年を超える老舗企業。200年企業を承継した二人が経営者として大切にしていること、故郷に対する想いや事業を未来へつなぐためのビジョンなどについて語り合った。

27年前、日本青年会議所での邂逅

鈴木　水野さんとの出会いは、1996年。当時、私が委員長を務めていた日本青年会議所の国際協力教育プログラム委員会に水野さんも出向されており、交流が始まりました。私が所属していた刈谷青年会議所と、水野さんが所属されていた福井青年会議所は、互いに行き来しながら旧交を温め、現在まで縁が続いています。

水野　日本各地を訪れ、様々な人たちと出会い、共に活動した青年会議所での経験は、全て今に繋がっていると感じています。人と人とのネットワークも随分広がりました。

200年企業が守り挑むもの

鈴木 文三郎
角文株式会社　代表取締役

水野 直人
黒龍酒造株式会社　代表取締役

守っていくもの、変えていくもの「不易流行」

鈴木　黒龍酒造さんは、200年以上にわたり日本酒を造り続けています。この伝統を守る上で大切にしてきたことは何でしょうか。

水野　「時代に合った良いお酒を造りなさい」という初代からの言葉です。先代の父は、燗酒が主流だった時代に、冷やして味わう新しい日本酒の飲み方を提案し、冷酒文化の普及に力を注ぎました。

鈴木　「黒龍　大吟醸　龍」を、一升瓶で1975年当時、通常の日本酒の2倍の5000円で発売したことも印象的でした。

水野　これを機に黒龍酒造の名は全国に広まったと思います。今では様々な国の人が日本酒を楽しむ時代になっています。いろんなタイプの商品を造った方が、日本酒の魅力をより多くの人に伝えられるのではないかと考え、今も少しずつ進化させています。

鈴木　理念は変えず、手法は変えていく。その考え方は、角文の企業精神である「不易流行」にも通じます。1993年に角文が日本で初めて発売した「一般定期借地権付分譲マンション」。土地は地主さんから借りて建物だけを購入するという、当時では画期的な販売方式でした。上質な住まいを低価格で提供できるメリットがある一方、借地の確保が難しいという課題がありましたが、地元で長年築いてきた信用で地主さんから「角文なら土地を貸しても大丈夫だ」と言っていただき、新事業を成功させることができました。今も「地域に密着し、お客さまを大切にする」という変わらない理念を持ち、新しいことに挑戦し続けています。

水野　まさに「不易流行」ですね。

大切にしている「言葉」と「仲間」

鈴木　会社を経営する上で、私は「衆知独裁」という言葉を大切にしています。社内社外を問わず、謙虚な姿勢で様々な知恵を集め、最終的な判断は経営者が責任を持って行うという意味で、部下を信頼して自主性を育てる、人材育成にも繋がる言葉です。

水野　私は、感動・感謝・感激、「三感」を大切にしています。お客さまが「感動」する商品やサービスをお届けする。すべての人たちに「感謝」する心を忘れない。社員が「感激」する仕事の場を提供する。この「三感」を意識して、会社づくりに取り組んできました。

鈴木　建築と日本酒はあまり関係ないように思えますが、地鎮祭や竣工式では必ず神主さんに来ていただき、お神酒を献上しています。鈴木家の古文書には、日本酒を詰める杉樽を造っていたという記録も残っており、個人的にも縁を感じています。

水野　鈴木さんをはじめ、仲間の存在を心強く思っています。世界的に見ても日本は100年企業が多く、これから世界における日本の老舗企業の役割は増えてくる気がします。

ESHIKOTOの「先にあるもの」

鈴木　今回の対談場所の臥龍棟（がりゅうとう）は素晴らしい建物ですね。臥龍棟がある観光施設「ESHIKOTO（エシコト）」は、どのような思いでつくられたのでしょうか。

水野　フランスやアメリカのワイナリーのように、風土や食、人との出会いを楽しむツーリズムを地元・福井から発信したいと思い、「ESHIKOTOプロジェクト」を立ち上げました。

鈴木　現在は、臥龍棟の他に、お酒と食事を楽しめる「酒樂棟（しゅらくとう）」の2棟が完成しています。今後はどのように展開されていくのでしょうか。

水野　施設の新設のみならず、敷地も拡大していく予定です。「訪れるたびにどんどん変わっている」そんな楽しみをお客さまに提供し続けたいのです。「酒」というカテゴリーにとどまらず、「食」「文化」にまで広げ、地元ならではの新しい魅力を生み出す場所にしていきたいですね。

福井と刈谷。それぞれの「地元」に対する想い

鈴木　地元への貢献という側面では、豊田市足助町に約235㌶の山を所有しており、その約半分の土地を使って社員や社員の家族と一緒に間伐をしたり植林しています。「300年の森づくり構想」を立ち上げ、森づくり山づくりをコツコツと続けています。

水野　私たちは、200年ずっと同じ場所でお酒を造っています。酒造りには、きれいな水と空気が必要です。地元の自然環境を守ることも私たちの使命だと考えております。

鈴木　愛知県刈谷市や安城市では今、中心市街地の活性化を図るための再開発事業が進んでいます。角文は「コンパクトシティ」をコンセプトに掲げ、スーパーやカフェ、保育園、デイサービス、病院など、生活に必要な機能が近接した効率的で持続可能な都市づくりに取り組んでいます。生活に必要な施設を徒歩圏内に配置し、できるだけ地元の商店や企業に参加していただきたいと考えています。少子高齢社会を見据えた、地域のためのまちづくりは、私たちの使命ですから。

会社を未来へ引き継いでいくための「ビジョン」

水野　亡くなった父からは、「石田屋という屋号を次に繋ぎなさい」と言われてきました。売上を伸ばして会社を大きくすることではなく、石田屋という〝理（ことわり）〟を次世代につないでいくことが、継承する上でとても重要なことだと考えています。

鈴木　私は、企業経営は年輪のようだと思っています。一気に大きくなりすぎると必ずどこかでほころびが出てきます。「地域に必要とされ、若い人たちが働きたくなるような企業になる」といった姿勢も、年輪経営に繋がっていくのだと思います。

水野　お酒は世界中にビジネスチャンスがあります。飲酒を禁止されている国でも観光地やホテルなどでは、お酒の需要があります。いま何が必要とされているのか考えながら、時代にあったお酒を提供し続けたいと思います。

鈴木　私は「邂逅」という言葉が好きなのですが、いろんな場所に出向いて、いろんな方と出会い、いろんなアドバイスをいただくことが、経営者としての先見性につながっていくと思っています。200年企業の経営者として新たな一歩を踏み出す私にとって、力強い後押しになったと思います。

黒龍酒造の「ESHIKOTO（エシコト）」

角文株式会社　会社概要

所在地	愛知県刈谷市泉田町古和井１番地
TEL	0566―22―1811
代表者	代表取締役社長　鈴木文三郎
創業	文政６年（1823年）
事業内容	総合建設業・不動産開発業
従業員数	136名

企画・制作　中部経済新聞社 三河支社

角文200年のあゆみ